

「まちあるきに資するガイドブック・HP 作成プロジェクト」

鳥越けい子

はじめに：

本プロジェクトは、都市デザイン・まちづくりに役立つツールとしての「まちあるきに資するガイドブックならびに HP の作成」をその最終目的とするが、活動テーマには「まちあるき活動のコンテンツならびに体制づくり」そのための「調査活動」等を含む。2019 年度はそのフィールドとして 1)「善福寺池とその周辺地域」、2)「渋谷神泉円山町」の二つのエリアを設定し、各種の活動を展開した。

本稿では以下、上記のフィールドごとに今年度の活動内容について、成果事例等を示しながら報告する。なお「善福寺池とその周辺地域」については ACL の研究プロジェクトとしては今年度初めて扱うことになったため、フィールドそのものの解説とプロジェクトの経緯、本プロジェクトにおける位置付け等を含めて解説する。

1. 善福寺池周辺のガイドブックとウェブページの作成

1-1. フィールドとプロジェクトの位置付け

善福寺池（図 1）とその周辺は現在、都立善福寺公園となっている。この土地は古来、武蔵野台地における貴重な水と緑の拠点であり、井之頭池、三宝寺池と並び、社会・文化的にも重要な意味をもつ武蔵野三大湧水池のひとつである。奥多摩等の山地や丘陵からの水の流れが地下に潜り、武蔵野台地に降り注いだ雨と一緒に、扇状地の端のところで地上に湧き出した水源で、周囲には旧石器-縄文時代以来、一貫して集落が形成されてきた。また、水の物理的な供給地としてだけでなく、雨乞い等の祀りが執り行われる「聖なる空間」として地域の暮らしを支えた「トポス」でもある。



図 1. 善福寺上池（筆者撮影）

善福寺池が位置する現在の杉並区最北部は、中世から近世まで「井草」と呼ばれており、明治時代になると井草村は荻窪村と合併し「井荻村」となった。明治40年に井荻村の村長となった内田秀五郎は、当時完全な農村だったこの地域において土地区画整理事業を展開すると同時に、池を中核とする地域を「風致地区」とし、地主たちを説得して池とその周囲の土地を東京都に寄付して公園とした。それが昭和32年、東京都市計画公園となり、その一部が昭和36年6月「都立善福寺公園」となって現在に至っている。善福寺池は筆者にとって「故郷の池」であり「地元の池」である。幼少期よりごく身近な存在であったためか、長年それを「研究対象」として位置付けることがなかった。そうしたなか、青山学院大学総合文化政策学部への赴任がきっかけとなり、筆者は2010年以降、善福寺の池とその周辺地域における環境文化資源の「発掘・共有・継承・発信」を目標として、善福寺公園と周辺地域を拠点に毎年11月に開催される「地域の文化祭」としての「アートとまちづくりイベント」、「トロールの森」への参加作品として「池の畔の遊歩音楽会」(図2)の企画を開始することとなった。

「トロールの森 2015」参加・http://www.trollsinthepark.com/

池の畔の遊歩音楽会 2015

音のすむ森に捧ぐ! vol. 6

A pondside walk concert 2015:
dedicated to the forest, a habitat of various sounds! Vol.6

参加無料

辻 康介 | 鳥越けい子 | 鈴木広志
Kosuke Tsuji | Keiko Torigoe | Hiroshi Suzuki

2015年11月21日(土) 14:00 - 16:00

集合場所: 都立善福寺公園(上池)のステージ付近
東京都杉並区善福寺 3-9-10
(JR「荻窪」「西荻窪」、西武新宿線「上石神井」からバス)
集合時刻: 開演時刻の10分前(プログラムの配布等を行います)

14:00 から約1時間の遊歩音楽会(池の周囲を巡りながらのライブコンサート)の後、集合場所のステージとその周囲の空間を会場に、トーク&ライブを行います。(少雨決行)

企画: ナビゲーター: 鳥越けい子
協力: 都市楽士プロジェクト、DaNemo、大塚聡

特別な場所

鳩文人よ!

井戸

善福寺池 (上池)

弁天島

中島

集会所

善福寺公園 サービスセンター

星敷林

雨がない、水がない

私は観察を見た!

本日の幸福

スナラカチャ

ゆっくり眠ろう

月の出の頃

聖フランチェスコ巡礼の歌

池の音

池に集う鳥たち

水運局

ボート乗り場

池の畔の遊歩音楽会 2015

辻 康介 (声楽家)
主宰するグループでSESTETTO Vocale(4人組)でマドリガル、南蛮ムジカ(クラシック)演奏作品「南蛮ムジカのオキフェス」、オーケストラコンサート「大人のための徳太郎」などのコンサートを企画、演出。モンテヴェルディ(オペラ)、「百城絶頂」(オペラ)の原案下り(尺八演奏会・演劇)のオキフェス役、イナナノの原案下り(尺八演奏会・演劇)のイナナノの原案下り。

鳥越けい子 (自然観察家/サウンドスケープデザイナー)
日本各地の自然文化の調査研究をおこないつつ、音の風景から「自然の音」を捉え、それを現代の音楽に落とし込む。自然文化の継承や伝統文化の新たな活用・展開を視野に入れたまちづくり、環境をめぐるデザインから様々な種類のプロジェクト等を手掛けている。専門は音の環境文化学・サウンドスケープ。音風景の達人(うらな)はちばら、メジャー、演出: 青山学院大学総合文化政策学部長教授。

鈴木広志 (ピアノ/作曲者/作曲家)
2003年東京芸術大学卒業(器楽科サクソフォン専攻)。クラシック音楽で培った技術を基にポップスやジャズ、ワールドミュージックの世界まで自由自在に活動し、多岐にわたるジャンルを幅広く手がけている。11ヶ年を務めたサンシャインシティの池、池田清見及キキフネキップ、東京中城、船橋久慈グループなどで活動は国外でも評価され、ヨーロッパ、アジア各地の国際的な音楽祭に毎年出演している。

野外×アート×まちなか「トロールの森 2015」
「トロールの森」は野外(都立善福寺公園)から、まちなか(西荻窪周辺)までアートでつなぐイベントです。
会期: 2015年11月3日(火)～11月23日(月・祝)
会場: 都立善福寺公園、西荻窪周辺
主催: トロールの森2015実行委員会
協賛: 東京都、杉並区、杉並区教育委員会
協賛: 杉並区文化芸術活動推進事業
協力: 杉並区文化芸術活動推進事業

図2. 池の畔の遊歩音楽会 2015 のフライヤー

<池の畔の遊歩音楽会>は、毎年一回「トロールの森」開催期間中の特定の日、善福寺池（上池）を約1時間かけて歩き（回遊し）ながら実施するプロジェクトのタイトルである。当初、音風景案内人（ナビゲーター役の私）による「語り／解説」と、吟遊詩人（歌手の辻康介氏／図3）による「うた（歌・謡・吟）」、両者の掛け合いを基本のスタイルとした。池の周囲で予め選んだいくつかの地点で、その場所の来歴等について私が解説をし、辻氏が私の思いを歌にして吟じる。参加者はそれぞれの場所特有の気配を感じ、土地の記憶に思いを馳せるといもので、その内容は「遊歩音楽会」というアートイベントとして展開される「まちあるき活動」として位置付けることのできるものだった。

そのようにして生まれた歌は、音楽会の回を重ねるごとに少しずつ増え、池周囲の各地点に蓄積されていった。パーカッションやサクソ奏者といった音楽家たち、踊り手や詩人、さらに私のゼミに所属する若者たち、地域の住民たちがさまざまな形で参加するようになった（図4）。当初設定した構成を基本としながらも、私を中心に毎年メンバーの何人かと適宜、その年のプログラムと必要な歌（これまでの歌からどれを使うか、それとも新しい歌をつくるのか）、音具その他についての検討するようになった。



図3. 吟遊詩人として歌う辻康介氏 図4. 2017年度の遊歩音楽会サポーター（鳥越ゼミ学生たち）

あわせて<池の畔の遊歩音楽会>プログラムのコンテンツづくりのため、<西荻→善福寺池フットパスプロジェクト>（図5）といった「まちあるき活動」やシンポジウムをはじめとする各種トークイベントを、「トロールの森」の「まちなか企画」として実施するようになった。また、年間を通じて、善福寺池とその周辺地域をテーマにした各種調査研究活動に携わるようにもなった。

こうした活動を踏まえ、2019年に<池の畔の遊歩音楽会>が「10周年」を迎えることから、その活動を当該地域のまちづくりにより明確な形で生かす方法として、これまでの活動成果をまとめた「まちあるきガイドブック」ならびに「ウェブページ」作成の作業を開始することとした。

フットパスプロジェクトとは？

フットパス[foot-path]とは、19世紀後半のイギリスでその取り組みが始まった「自然や歴史文化(風景)に親しむために歩くこと[foot]ができる散策路・小径[path]」のこと。その整備を通じて、地域そのものの魅力に共に気づき、その体験から地域のあり方や考え、まちづくりを推進していくこととするものです。この考え方は日本にも伝わり、各地でさまざまなフットパス活動が展開中。そうした活動を支援・連携する「日本フットパス協会」といった団体も設立されています。

西萩 ▶▶▶ 善福寺池フットパスプロジェクト

「西萩to善福寺アートドロップス」(2014年)をきっかけにスタートした道案内ワークショップ。善福寺在住の鳥越けい子が、各種団体や個人との連携のもと、青山学院大学総合文化政策学部のゼミ生たちと制作・実施しています。「アート活動としてのまち歩き」に挑戦した1年目に対し、今年は3名の案内人と共に、まちの成り立ちや歴史をひもときます。現在の町なみ、区画整理や宗教施設、湧水や水みち等、毎回異なるルートで巡り、参加者たちとまちの風景、まちの人々、一緒に歩く人たちとの間に生まれる交流を「新たなまちづくり活動」として展開します。

11.3 (火・祝) 10:00 -
「表面に顯れるもの」
戦前、終戦直後、60~70年代、そして現在。農家、サラリーマン、文化人、カウンターカルチャー、ニューエイジなどの古い写真を見ながら、様々な文化や時代が混ざり合うまちの魅力を探るルート。

11.8 (日) 13:30 -
「骨格を支えるもの」
西萩駅前北口そばの稲荷神社を皮切りに、区画整理された街路や、井草八幡宮等の神社をたどりつつ、この地域の風景を形作っているまちの基礎を、地形や歴史、信仰の拠点等から探っていくルート。

11.22 (日) 13:30 -
「基底に流れるもの」
駅から北へ向かい、善福寺の川沿いに美濃山橋から下池(新池)に入り、善福寺上池を流れるルート。武蔵野三大湧水池のひとつ、かつて「遊野井」と呼ばれた池の成り立ちを探る。

案内人
野田 栄一 (Eiichi Noda) トロールの森事務局代表、善福寺池周辺に先祖代々の暮らす原住民。10年ほど前より、文化財ボランティア等の地域活動にいそんでいる。
寺田 史朗 (Shirou Terada) 前杉並区立郷土博物館長。地形・地質、遺跡、石仏、信仰等の各種地域情報から、まちの魅力を再発見して楽しんでいる。
神谷 博 (Hiroshi Kamiya) 建築家、水みち研究者。雨水や水系をテーマにした学術研究を展開すると共に、水みち研究会代表等として市民活動を展開している。

グループ(青山学院大学 総合文化政策学部 鳥越研究室)プロフィール
研究室のテーマは「サウンドスケープ(音風景)から読む都市/音・音楽とまちづくり」。「都市のみえない資源」「土地の記憶」を探るための方法を学びながら「アートとまちづくり」関するさまざまな活動に参加しています。

- 集合場所: JR西萩駅・改札を出た所 (旗を持った旗の姿を見つけてください！)
- 受付開始: スタート時刻の15分前 (地図等の配布資料があります)
- 定員 15名 (お申し込みのみ) ● 雨天決行 ● 参加費無料
- ご予約・お問い合わせ先:
「トロールの森2015」のWEBサイト(<http://www.trollsinthepark.com/>)の「まちなか」⇒「西萩-善福寺池フットパスプロジェクト vol.2」⇒「予約フォーム」から、またはメールを「troll.footpath2015@gmail.com」(鳥越ゼミ宛)にお送りください。

● 助成: 平成27年度科学研究費 15K14100

図 5. 2015 年度開催フットパス (まちあるき) プロジェクトのフライヤー

このフィールドに関連する今年度の主な活動内容としては、「御嶽山での調査活動」「10周年を記念したガイドブック作成」「2019 年版<池の畔の遊歩音楽会> 動画記録作成」等があった。以下、その概要を報告する。

1-2. 武蔵御嶽山での調査活動

「江戸東京学」においては、家康がやってきて「城下町」として開発した「江戸」、さらには明治の文明開化以降の「東京」を中心とする都市研究の基本コンテクストがある。そのため、善福寺池が位置するエリアは一般には「東京の西郊 (西部郊外)」として捉えられてきたし、そうしたイメージと意識が、報告者自身のなかにもかつて色濃くあった。

しかし、2010 年以降の<池の畔の遊歩音楽会>を中心とする各種の活動を通じて、報告者はこの地域に眠る「江戸時代以前」の各種の土地の記憶や歴史の古層の存在をさまざまな形で意識・確認することになった。たとえば、家康が江戸に幕府を開くまでは、

現在の東京都心にはほぼ何も無かったが、善福寺池周辺には旧石器時代、縄文時代から人々が継続して住居をつくっていた。中世・鎌倉時代にも、この地域に暮らす人々は、府中の大國魂神社、さらには多摩の霊山との深い関係をもって生きてきた。¹⁾

善福寺池と周辺地域の文化資源をそのような文脈において確認する作業はまた、2015年前後より報告者が「水都府中研究会」に加わり、そのフィールドワークのいくつかに参加するという形で展開した。2017年以降の〈池の畔の遊歩音楽会〉の出演者に、多摩川源流小菅村に伝わる玉姫伝説を踏まえた創作神楽のメンバーが参加することになったのにはそうした背景がある。

「水都府中研究会」を主催する神谷博²⁾によれば「玉姫伝説」の位置付けと粗筋は次のようになる：

そこ（玉姫伝説）には、玉川の名前の由来が玉姫にあると記されている。玉姫伝説は鎌倉初期に遡るとみられる伝承で、最近まで口承で伝えられてきた。これを伝承者である余沢在住の横瀬健氏が2005年3月1日に「玉川昔話／多磨源流の大蛇」という絵物語として書き起こした。末代まで口伝で遺すことが困難と判断したためである。

（その粗筋は）玉姫一行が追手に追われて逃げる途中に余沢でかくまわれ、その後、池の平で追いつかれて討たれたというもので、その際に玉姫は大蛇に変化して、恋仲となっていた供の若者である大青は狼に変化し、二人は永く池の平で仲良く暮らしたが、ある時の大雨で池が崩れ、大蛇は流されてしまい、狼は悲しんで後の世まで泣き続けたという物語である。

（中略）横瀬健氏の語りによれば、玉姫は畠山重忠（1164年～1205年）の息女だという。さらに、玉姫の従者であって生き延びて小菅村に潜伏したのが横瀬氏の祖先だったという。生存者はもう一人いて、二人は別々の場所に潜むことにして、もう一人は隣村である上野原の西原に逃げたというが、その後の連絡はとれなくなったという。これらを横瀬健氏は祖母から口承で引き継いだ。畠山重忠は秩父平氏の有力な一族であり、横瀬氏は秩父の横瀬一族の末裔とみられることから、玉姫の警護の一員になっていたと考えられる。³⁾

2019年7月13日、報告者は水都府中研究会主催の「歩く会第13回：畠山重忠終焉の地・二俣川を歩く～重忠と菊の前のものがりを辿って」に参加し、地元で歴史案内ボランティアをしているグループに道案内をいただき、重忠についての話を聞いた。その結果、生前には「遅野井伝説」の地である善福寺池を頼朝と共に訪れたと思われる重忠の人柄、さらには死をきっかけとした玉姫逃亡の物語を身近に感じる事となった。さらに9月21日には、畠山重忠が奉納した赤糸威大鎧のある等、重忠との縁の深い武蔵御嶽神社を訪れ、神楽殿における玉姫神楽公演とそれに続くセミナーに参加すると共に、同地に1泊して御嶽神社周辺地域のフィールドワークを実施した（図6）。武蔵御嶽神社の神職を対象とした聞き取り調査の結果、神の使いとして、武蔵国において今も生きる「おいぬさま」としての「狼信仰」が、江戸時代からそのお札（図7）と共に広がったこと、かつて遅野井村と呼ばれ、明治以降は井荻村となった善福寺池周辺地域では

今もその御嶽講が生きていることを確認することとなった。



図 6. 武蔵御嶽神社宝物殿
入口の畠山重忠像



図 7. 武蔵御嶽神社の護符
(善福寺池周辺の旧家等で現在も多く見られる)

1-3. 10周年を記念したガイドブック作成

<池の畔の遊歩音楽会>が2019年、その「10周年」を迎えることから、これまでの歩みについての振り返りの作業を行い、その内容を「池の畔の囁きガイドブック」にまとめ、公演当日に参加者に配布することとした。

ガイドブックのタイトルに「囁き」という言葉を入れたのは、会場の都立善福寺公園で開催されている「トロールの森」(本プロジェクトが参加する「アートとまちづくりイベント」)2019年の共通テーマが「囁き[Whispers]」であり、そのコンセプトが「土地の囁きを聴き取る」という本プロジェクトの趣旨と深く呼応するものだったからである。報告者が、ガイドブックのデザインを依頼したのは、遊歩音楽会初回からの協力者の鷺野宏氏(都市楽師プロジェクト主催)。なお本企画は「ガイドブック」という呼称を以って進めたが、鷺野氏の参加者がそれを携帯して歩きやすいよう鷺野氏より提案のあった「ジャバラ方式」を採用した。

過去10年間のプログラム全体の記録として、その「表面」(図8)には、遊歩音楽会の次のような趣旨等をまとめた：

○趣旨：

- ・アートとは、日常生活において無意識に形成している「環境と自分との間の皮膜」を剥がす行為です。
- ・音の世界は、目には見えない、形に留まらない世界からのさまざまなイメージを私たちに届けてくれる。土地の記憶を呼び覚まし、その歴史を「私たちの今此処」に繋げます。
- ・音は、この土地の精霊を呼び出し、その力を引き出します。
- ・トロールの森に棲む精霊たちが伝える「池と土地の囁き」に耳を澄ませ、周囲の気配に身体を開く。音の精霊たちと遊びながら、この土地の記憶を呼び覚まし、その歴史を紐解

く。そうした活動を、この地域の未来に活かそうとするプロジェクト、それが「池の畔の遊歩音楽会：音のすむ森に捧ぐ！」です。

○遊歩音楽会参加の心得：

- ・風の動き、木々のざわめき、生き物たちの気配を聴き取る！
- ・周囲の環境に全身を拓き、土地の記憶に想いを馳せる！
- ・地域の未来を思い描き、そこに自分がどう関わっていけるかを考える。

○伝えたいこと：

- ・人間が音を出すのは何故か？
- ・それは周囲を聴くため・感じるため。
- ・土地の囁きを聴き、囁きを返す。
- ・それが私たちの「生」を支える音風景。



図8. 池の畔の囁きガイドブック（表面/ジャバラ折にする前の状態）

次に「裏面」には、2019年のプログラムに関する各種の事項についての解説を上池の地図と共に配置した（図9）。したがってここには、今年度導入した新たな要素として、三峰や御嶽山において「日本武尊の道案内」として伝えられている「白い狼の舞」についても記すこととなった。



図9. 池の畔の囁きガイドブック（裏面/部分）

「遊歩音楽会」の今後の展開にとっては、当日配布のガイドブック等と共に、このプロジェクトに関するウェブページ作成が有効である。報告者は、ここ数年そのように考えおり、遊歩音楽会当日の動画作成もまた、そのための必須の作業となると考えている。そ

のため、11月17日(日)に開催した<池の畔の遊歩音楽会 2019:音の棲む森に捧ぐ! vol.10>(図10)は、以下に示すようなタイムスケジュールにしたがって池の周囲をぐるりと一周歩きながらプログラムを実施し、その活動全体を2台のビデオカメラによって記録した:

「トロールの森 2019」参加 ▶ <http://www.trollsinthepark.com/>

池の畔の遊歩音楽会 2019

音のすむ森に捧ぐ! vol.10

A pondside walk concert 2019:
dedicated to the forest, a habitat of various sounds! Vol.10

2019年11月17日(日) 13:30 - 15:00

集合場所: 都立善福寺公園(上池)のステージ付近 **参加無料**
 集合時刻: 開演時刻の10分前 ※少雨決行
 協力: ラジオばらばら

善福寺池 (上池)
 舟天島 中の島

歩行奉納

現実
 ↓
 幻想

ハイアート
 ↓
 芸能

boat
 乗り場

cast
 トチアキタイヨウ
 Tochiaki Taiyo
 チェ・ジェ Chol
 Choi JaeChol
 nonoliko
 Nonoriko
 花ヲ
 Hanawo
 Sango
 Sango
 月姫虹(つきこ)
 Tsukiko
 +
 鳥越けい子
 Keiko Torigoe
 &
 青山学院大学
 総合文化政策学部
 鳥越研究室所属学生
 The Students of School of
 Cultural and Creative Studies,
 Aoyama Gakuin University

善福寺の池は、なぜここにあるのか? これまでここで、
 どのような出来事があったのか? 池の畔を歩きながら、
 土地の記憶を呼び覚まし、その歴史を紐解く不思議な音楽会。
 今年は10周年を記念して作成する「池の畔の囁きガイドブック」
 と共に、池とその周辺地域の歴史と風土を辿ります。

都立善福寺公園
 ACCESS

東京都杉並区善福寺 3-9-10
 JR「荻窪」から関東バス南善福寺行き「善福寺公園前」下車
 JR「西荻窪」から関東バス、あるいは西武バス 上石神井駅行き(大泉学園駅行きも有り)「善福寺」下車 徒歩5分
 西武新宿線「上石神井」から関東バスあるいは西武バス西荻窪駅行き「善福寺」下車 徒歩5分

図10. <池の畔の遊歩音楽会 2019:音の棲む森に捧ぐ! vol.10> ファイアー

スタート地点 (ステージ):

13:20- ガイドブックの配布を始める。

13:30 トチアキタイヨウ (ナビゲーションと踊り) による冒頭の口上。

- ・ <池の畔の遊歩音楽会>というタイトルと今年はその「10周年」に当たることと「池

の畔の囁きガイドブック」についての説明し、趣旨を読む。

- ・ 開始の儀式：斉唱の歌手、2010-2016 までの「放浪の楽師」辻を紹介。
- ・ 「池の畔の囁きガイドブック」は「土地の囁きを聴くためのガイドブック」であると同時に、みなさんがそれを囁き返すためのガイドブックでもあることを説明。
→鳥越（ナビゲーション）が9番の屋敷林を指さし「屋敷林と竹林」を小さな声で読む。トチアキは「あんなふうにやってください」と指示。
- ・ 「3つの心得」を皆できちんと読んだ後、足元に気をつけていざ出発！（図 11）

地点 1：ガイドブックの「音聴き歩き」を読む。鳥越は目隠し歩きで行く。

参加者には紙コップを渡し、希望者には手ぬぐいを渡して全員出発。

地点 2：nonoliko による「あわのうた」の踊り。あわせてテキストを読む。

地点 3：参加者を階段に誘導し、「遅野井伝説」と「市杵島神社と雨乞い」を読む。

珊瑚花（花ヲ・Sango・月姫虹）による玉姫神楽

地点 4 → 5：「玉姫の物語」を読む

地点 6：トチアキによるカワウソの踊り／チェによる「白い狼の舞」（図 12）

地点 6 → 7：参加者に紙コップにこれまでの感想、今考えていること等を囁くよう指示！

出演者は皆一緒に歩く。歩きながら周囲の音風景に木霊を返す。

地点 7：ガイドブックの「内田秀五郎」読む。

今まで紙コップのなかに囁いていたことを隣の人に囁く。囁きの伝言ゲーム。

地点 8：月姫虹による「カワウソの記憶」朗読、花ヲとチェによる伴奏

再びスタート地点：トチアキによる締め言葉 → 鳥越：参加者へのお礼と挨拶



図 11. トチアキタイヨウ先導の「音聴き歩き」

図 12. チェ・ジェ Chol による「白い狼の舞」

上記計画に関しては、時間その他の関係から、実際には実行できなかった部分もあったが、そうした「収録データ全体」を公演終了後、約30分の動画として編集した。これらの動画を、過去10年間のデータと共に整理し、ガイドブックにまとめた内容と共に「池の畔の遊歩音楽会」ウェブサイトを作成することは、来年度以降の課題である。

2. 渋谷神泉円山町におけるまちあるきの実践

「渋谷・青山の歴史と今」をテーマに、2017年度には『<渋谷の元>をさがして古くて新しい神泉・円山町を歩くためのガイドブック』の日本語版を、2018年度にはその英語版を既に作成してきた。今年度は、これまでの活動を渋谷神泉円山町の今後のまちづくりにより効果的に生かす方策について、報告者が所属する都市環境デザイン会議(JUDI)の協力を得て検討することとし、本プロジェクトに関心をもつ JUDI メンバーと共にまちあるきを行った。

こうした活動を踏まえ、3月には「SCAPEWORKS 円山町 2019」をシンポジウム形式で開催するという計画を立て、その準備を進めていた。会場としてアスタジオを予約し、講師の依頼等を含めた準備を進めていたところ、新型コロナウイルスへの対策のため、その開催を延期せざるをえない事態となった。

そのフライヤー(図13)が示すように、「音風景でたどるまちの記憶と今」と題して11月29日(金)に開催したまち歩きは、都市環境デザイン会議関東ブロック主催、報告者が企画担当ならびに「まちづくり案内人」となって実施した。

都市環境デザイン会議 関東ブロック キャラバン
 JUDI 関東ブロック主催 東北ブロック共催 青山学院大学総合文化政策学部 ACL
 (青山コミュニティラボ) 協力
 開催発表: <http://www.scapeworks.jp/soundwalk01.html>

音風景

05 石臼の音と音風景
 06 音風景から下町を巡る
 07 音風景から下町を巡る
 11 世界の音が防犯に役立つ

詳しくはこちらを参照してください
<http://www.scapeworks.jp/soundwalk01.html>

申込〆切
2019年11月22日厳守

参加申込み先: JUDI関東ブロック2019円山町キャラバン申込みフォーム
<http://forms.gle/zXcgW66rbY4p5i0b8>
 お問い合わせ: 都市環境デザイン会議 関東ブロック幹事 平松理苗
soma_hira@aca-id.co.jp 090-2736-4324

図13. JUDI との協働で開催した
円山町まちあるきのフライヤー

当日の参加者（18名）には、2017年度に作成したガイドブックを配布すると共に、2018年に作成したウェブページのアドレスをフライヤー等の案内ツールに活用することによって、以下に示すプログラムによって開催したまちあるきに関する各種のシーンで、ガイドブックとウェブページ双方のツールがさまざまな形で役立つことを確認することができた。

15:00

神泉駅改札口集合

弘法湯石碑の見学と佐藤豊氏（弘法湯末裔）による解説



15:20

料亭「三長」の見学と高橋千善氏（三長オーナー）による解説



16:00

神泉・円山町のまちあるき開始



第1解説地点：井の頭線線路上の駐車場



第2解説地点：百軒店児童遊園地（図14）



第3解説地点：千代田稲荷



第4解説地点：ユーロスペースを見下ろす駐車場



第5解説地点：円山町児童遊園地



17:30

料亭「三長」における意見交換ならびに懇親の会（図15）



図14. 百軒店児童遊園地での解説



図15. 料亭「三長」における意見交換ならびに懇親の会

上記プログラムの成果にはさまざまなものがあったが、特筆すべきは、料亭「三長」の室内を会場として、都市に関する専門家たちとオーナーの高橋氏が語り合う会を開催できたということである。そこに参加した人々を中心に、議論を深めながら、まちあるきガイドブックとウェブページの活用方法を検討することは来年度の課題としたい。

.....

脚注：

- 1) 家康が江戸に入ってきたときに使った「滝坂道」（江戸と府中をつなぐ古道）を中心に形成されたのが渋谷円山町である。この点において、本プロジェクトが扱うふたつのフィールド間の繋がりを確認したことも今年度の成果のひとつと言えよう。
- 2) 建築家・法政大学兼任講師
- 3) 玉姫神楽講座第一回：玉姫神楽の深化に向けて「畠山重忠とその時代」配布資料